

甦える古民家

文化財記録映画シナリオ

▽企画 世田谷区教育委員会

▽制作 世田谷を記録する会

江戸以来の儀礼と工法にのっとり
ついに甦えた古民家

風土の中で

庶民の生活を刻み込んできた

民衆文化の遺産

草葺古民家

復原の全容を記録

歴史の生き証人の

解明にいどんだ映像



企画 世田谷区教育委員会

監修 建築 東海大学助教
日本大学専任講師

民俗 成城大学教授
歴史 信州大学助教

制作 世田谷を記録する会

監督・脚本・制作・日本記録映画作家協会
撮影

稲葉和也
片桐正夫
鎌田久彦
森安彦

撮影助手
ナレーター

音楽

録音

現像所 東洋現像所

浅野辰雄
福沢康道
中尾駿一郎
金山富男
谷沢彰
高島陽
金子亞吉良
太田六敏

協力

岡本民家園プロジェクトチーム
古民家を語る会

建築文化研究所

岡本自治会

天啓工事有限公司

株式会社 宗田組

有限会社 早川組

有限会社 喜多見土建

葺師(伊勢原在 熊沢俊勝外)

川崎木舞業

菅谷工業有限公司

岩崎瓦工業株式会社

長崎孫好家

浦野寛家

広田一義家

田島仲家

田中隆之氏

〔古民家には何が甦えるのか〕

記録映画「甦える古民家」をめぐるって

(岡本家園プロジェクトチーム代表・東海大学助教授)

稲 葉 和 也

私たちの記録映画「甦える古民家」が一年余りを費やしてようやく完成した。

この映画は、「古民家は語る」(昭和五十三年度、東京都記録映画コンクール金賞受賞)の後編で、古民家が復元されていく過程と、それが完成して人々に活用され、新たな文化財として甦っていくことに期待をこめて制作されたものである。

この二本の映画がまとめられる間には、民俗行事を中心にした「民俗は生きている」(昭和五十四年度)が作られ、また、今年度には、世田谷の代官大場弥十郎の思想と生き方を通じた「代官」もクランク・インしており、建築・民俗・歴史をおのおの主題とした記録映画の三部作が完成することになっている。この他に、埋蔵文化財(考古学)の分野でも「私たちの発掘」(昭和五十三年度、自主製作)が作られているので、合わせて四部作となるうか。これらは全て、世田谷区教育委員会の企画、世田谷を記録する会(会長浅野辰雄)の制作による。

これらの記録映画は、扱われている題材こそ異なっているが、そこで共通して追求されているテーマには、世田谷という地域の歴史と文化の掘り起こしと、その継承の問題がとり上げられている。

私たちの生活環境は、ここ数十年の間に史上まれともいえるほどの急激な変化をしてきた。これまで私たちの生活環境は、農業社会を基盤としたものであった。二千数百年にも及ぶ農業生産によってもたらされてきたわが国の文化は、近代以降の百年足らず、いや、戦後のわずかこの数十年の間にもたらされた、急激に成長した工業生産社会によって根底から作り変えられようとしている。

その結果、私たちが選択して進んできたこの工業化の道が、果たして正しかったのか否かは別問題としても、近代以降、少しずつ失われながらも継承してきた、かつての農業社会によって蓄積されてきた文化体系を、この数十年のうちに急激に失い、もはやその遺産を後世に残すことが不可能な状態に陥りつつあることは事実である。

特に、建築生産の分野ではその傾向が著しい。建築は、その材料、施工方式など全ての面で農業社会が基盤となっていただけに、工業化による影響は大きい。

労賃の上昇は、山林を見捨てさせて輸入材に頼ることとなり、さまざまな種類の木肌の美しさなど望むべくもなくなりました。そのうえ、巨大な外材は、電気ノコや電気カンナを発達させて、手仕事を加える余地もなくなった。茅葺や瓦の土葺も、鉄やセメント製品、石油化学製品にとって代わった。茅葺職人や土葺の職人の仕事も、今ではほとんどなくなった。土壁にしても同じことである。土壁の下地は、かつて竹木舞。木舞もボード類となり、左官屋がその上にセメントモルタルを塗る。床板や天井板も合板。土間は、かつては土のにおいのするたたきであったが、タイルやモルタルになった。

このように、建築材料は、今やほとんど工業製品となり、それに伴い、伝統的に受け継がれてきた地域の技術も、変革を余儀なく迫られている。わずか十数年ほど前まで、ごく普通に見られた地域の技術が、いざ再現してみようとなると、職人さがし、材料さがしで、全く困難な状態になっていることがく然とさせられる。

このような現象は、建築だけに限らない。衣服や食物にしても、また、習わしや行事についても同様なことがいえよう。

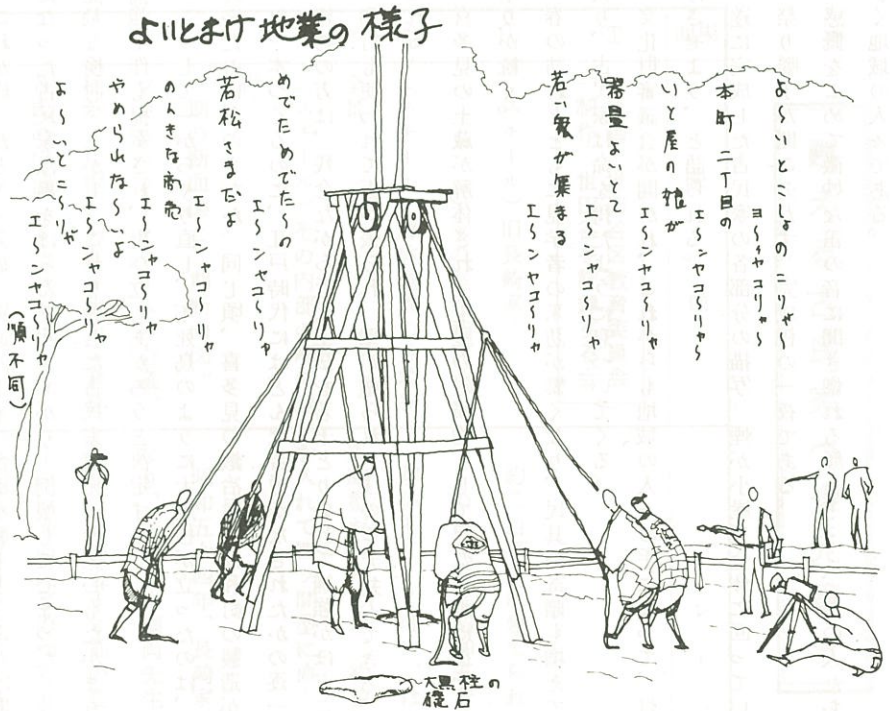
生産基盤の変化が、かくも私たちの生活環境を変えようとは、一体誰が予想しえたであろうか。十数年前までは、トイレット・ペーパーや石油の不足で、世の中がかくも乱されることがなかった。それに代わる代用品でも充分生活することができたのである。何でも充たされるスーパー・ショップと家を往復している限り、生活に四季はないし、工夫も生まれなし、文化が育つ基盤は希薄である。私たちが、自分たちの便利さだけを求めるのでなかったならば、トイレット・ペーパーや石油を使うまでに至った祖先の苦しかった足跡を、その過程を、私たちの子孫に何らかの方法で伝える義務がある。ただ自らの便利さと安逸だけを貪っているのでは、新しい文化を生み出す土壌は作り得ない。私たちが、つい最近まで育ってきた生活環境を大勢の人たちで掘り起こし、記録し、継承していくための最善の努力をすることが、現代の人に課せられた後世の人たちへの免罪符でもある。

かつて瀬田にあった旧長崎家の主屋を、現岡本町の民家園に復元するにあたって、その過程を逐一記録映画に収めたのは、近世に建てられたわずか一軒の古民家を、現代の私たちがいかに苦勞したかを後世の人たちに伝えたいという願望からであった。しかし、その過程では、私たち自身が多くのことを学んだし、さまざまな出来事もあった。鍛冶屋の広田さんは、一代で止めようと思っていた自分の技術を息子さんたちに引き継ぐことができたし、たたきや、へっつい作り方も長崎さんから伝授してもらった。また、茅葺や土壁の技術も克明に記録することができた。

私たちが目ざしたものは、単なる「モノ」としての民家の保存ではなかった。その「モノ」にまつわるさまざまな技術や伝承と人々との関わり、そして、そこでの生活、それら全てが充たされて、はじめて民家は存在していたはずである。

この民家を訪れる人には、床に上がって炉端で火をおこし、湯を沸かしてお茶を飲んでもらいたい。鍋もつついてもらいたい。そして、畑に出て水もまいてもらいたい。春には竹の子が裏の竹藪で採れ秋にはイモも採れるはずである。

この一軒の民家が、大勢の人たちに愛され、活用され、自分たちの今の生活との隔たりが実感される時に、はじめてこの民家は甦るのである。



〔 解 題 〕

浅野 辰雄

(世田谷を記録する会代表)

前篇『古民家は語る』では、二百年前、普通の百姓が建てた古民家を解体していく過程で、家と、そこに住んだ人たちの歴史、さらに、世田谷の庶民史を探求した。その方法としては推理をたて、痕跡をさぐり、古文書を調べ、建築と歴史と民俗の諸学問が協力して謎を解いていった。

後篇であるこの『甦える古民家』では、古民家を復元していく過程で、この地方に昔から伝わる「家を建てる技術」と「建築にまつわる民俗的風習」をできる限り再現しながら、現代文明が失った手づくりの温かみ、職方のもっている洗練された技術の高さを映像化し、さらに、江戸以来の埋もれていた庶民生活を探求することを意図した。

こうしたプロジェクト・チームの発想は、さまざまな技術をもった職人たちや、数多くの地もと住民や古老の参加、協力の輪をひろげ、地域の歴史と文化を掘り起こすことができた。

そして、古民家が江戸時代の姿をとり戻し、生きた古民家として、イロリの火を絶やすことなく地域住民に利用してもらうという方針が定着していくに従い、この家は地域住民共通の文化的財産となり、庶民史と地方文化の発掘と発展の、文化運動の拠点になりつつある。

「あらすじ」

この家は、長崎さんの先祖が、百五十年前、本百姓から百姓代（村役人）になった時に大黒柱を入れて拡大したが、その時の姿に復元することとし、さらに、江戸以来の民家のつくり方や、この土地に伝わる風俗習慣をできる限り再現していこうと決める。

地鎮祭、よいとまげ、部材の補強、柱の根を礎石の曲線にあわせて削るその他の作業を経て、棟上式を迎えることになるが、その間に、『古民家を語る会』が地域住民によってつくられ、また、トビ頭のお父さんが亡くなられるなどの不幸があった。

江戸以来の建て方と、古式にのっとった棟上式、披露宴、棟梁送りの儀式などが再現される。

茅ふきの下ごしらえ、そして、茅が運びこまれてくる。この茅は、去年の暮れに神奈川県伊勢原で刈られたものだが、その記録を挿入し、こんにちの茅ふきに入る。いまの日本では珍しくなった茅ふきの工程と、茅ふき職人たちの生活と技術と、『ふきごもり』の儀式などを紹介する。

次は、木舞竹を組んでの壁塗りの下ごしらえ。荒木田にわらを入れて踏み、壁土をつくって、壁の下塗りがはじまる。

これが終わったとき、突如、風速四十米の台風が襲来！ 南だけ開いてあとは壁でふさいで袋のようになつた古民家は風をはらんで吹きあがり、倒壊してしまつた。プロジェクト・チームのショックと深刻な検討。しかし、これを機会に古民家復元への関心もたかまり、二度とこの惨事を引き起こさぬ補強工作も提案され、再び立ちあがろうと決定する。

こうして一からやり直し、不死鳥のように大黒柱が立ったのは、台風後ふた月目だった。茅ふきが終つたのは冬のさなか。同じ頃、喜多見の鍛冶屋では和釘の製造が、昔ながらの方式で始まつていた。釘一本つくるのに、江戸時代にはどんな苦労がなされたかの逐一が再現される。

建物の方は、残念ながら近代工法を若干とりいれて補強がほどこされる。和釘も使われて板が張られ、壁が塗られ、すのこ天井もできる。土間のたたきや、へっついもつくられる。

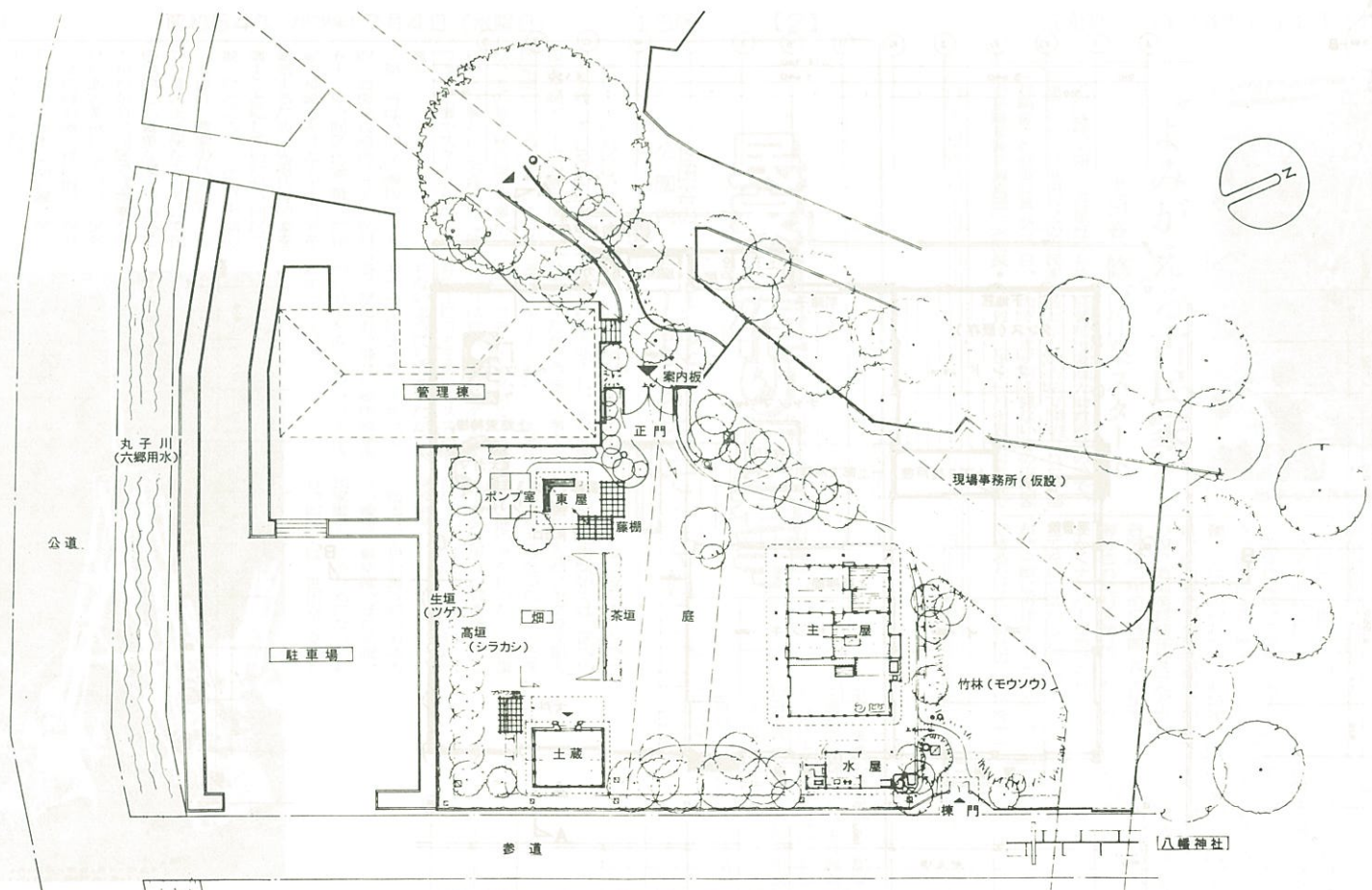
喜多見の土蔵が解体され、主屋の附属物として庭の一画に復元されることになり、瓦の土葺や漆喰塗りが続く。

春の訪れとともに見学者の来訪が繁くなり、民具の寄贈も増えてくる。いろりや、へっついに火が入り、古民家は命を得たように息づいてくる。

文化財審議会が開かれ、これからも地域の人々の手によって、灯された火を絶やすことなく燃え続けさせよう、と語られる。

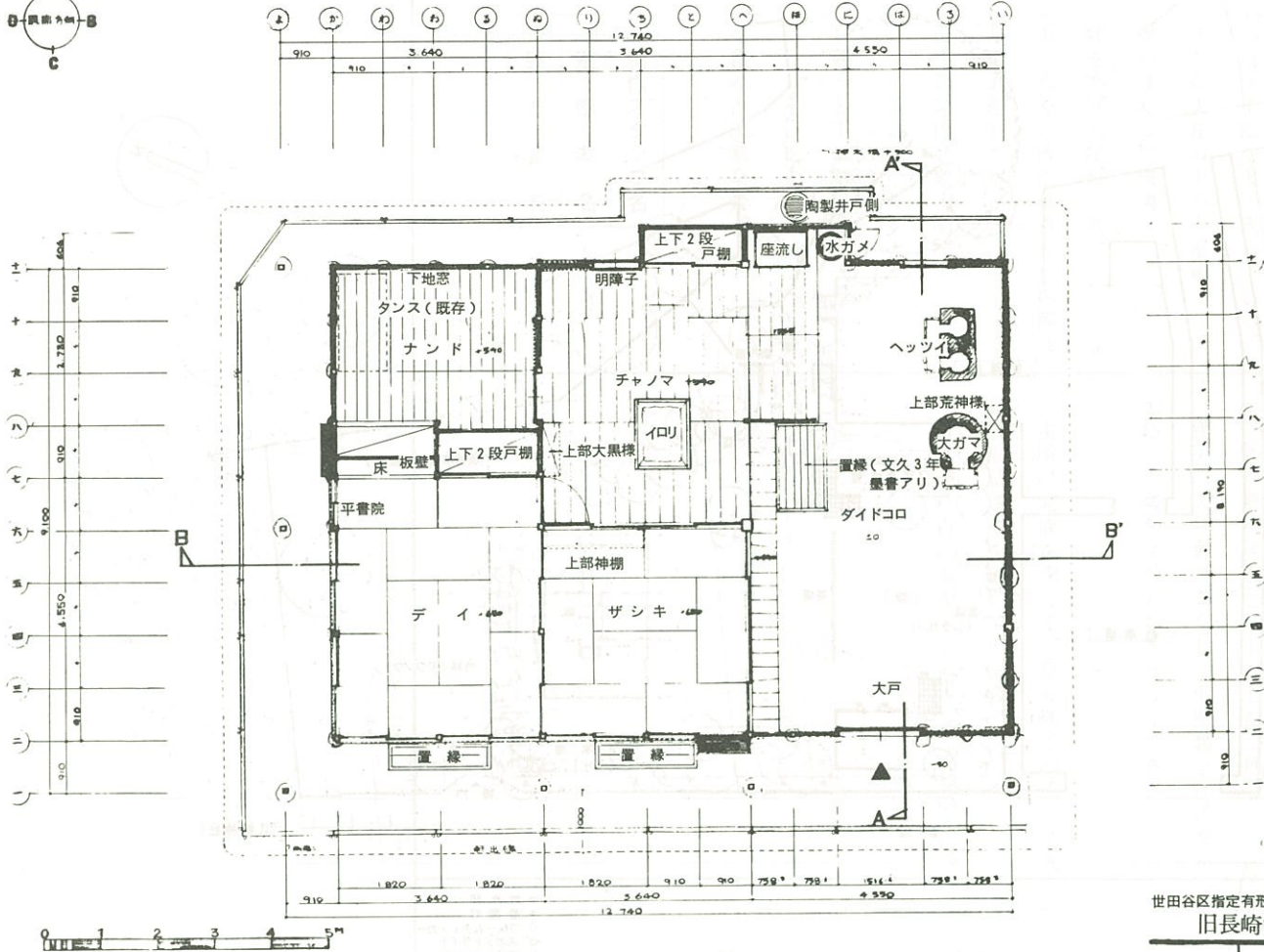
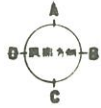
遂に完成した古民家の各部分の描写。煙が小屋裏全体に回っていく。祭り囃子が聞こえだす。完成祝の一夜である。

感慨をこめて微妙な笛の音に聞き惚れる顔々……、この人たちこそ、これから古民家を生かしていく地域の人々である。



- ⊙ 放水銃
- 庭園灯
- フレームチェッカー
- スポットライト
- 雨水・排水溝

旧長崎家主屋 配置図



世田谷区指定有形文化財
旧長崎家主屋再復元修理工事

5	平面図
	縮尺 1/50

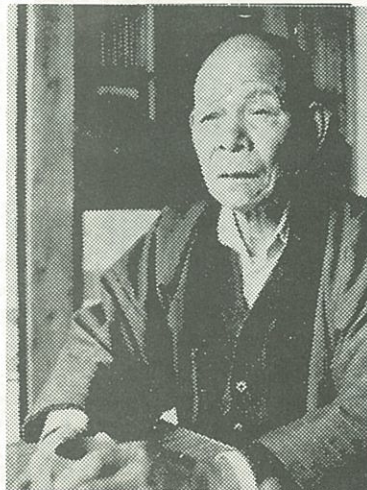
建築文化研究所 1988.08.21 宮上茂隆



区民登場

古民家復元のため 和釘を製作した鍛冶師 広田一義さん

喜多見3丁目=73歳



いま、岡本民家園の完成が急がれています。これは、江戸時代に建てられた「本百姓（村で有力な自作農）の家」を解体し、岡本公園に移築して保存するという文化的に重要な仕事です。

この貴重な建物は、もともと長崎孫好さんから区に寄贈されたものですが、それを復元するならば、昔のままの工法、古工具によってつくろうという方針が決まりました。しかし、それにはカベが立ち、はだかったのは当然かもしれません。

江戸時代に使った和釘を手に入れることも、その一つでした。釘類は、明治以降、洋釘に変わり、いまでは和鉄による和釘の製法を知っている人も見つかからない状態だったからです。

ところが、先祖代々の鍛冶師で、

日本刀や農具をつくらせてきた広田一義さんが、和釘の製法を伝授されていることがわかりました。区から和釘の製作を依頼された広田さんは、「ワシしかできないなら」と重い腰を上げました。そして、いったん引き受けた以上、すべて古式どおりにと、和釘づくりに情熱を傾けたのです。

広田さんが、長崎家を解体した時の古釘や玉鋼たまがねのクズ、古銭などを铸くなおしてつくり上げた和釘は、計2千200本あまり。

「一本一本、わたしの魂が入っていますよ」

広田さんの言葉には、昔かたぎの鍛冶師らしい誇りがあふれています。三人の息子さんたちも、

「父のひたむきな姿に触れ、改めて父を尊敬しました」

と言っていました。

